

家族を守ってくれた税

千歳市立富丘中学校3年 山本 姫愛

叔父は、四十歳でこの世を去った。死因はくも膜下出血だった。叔父は、先天的に血液の凝固因子が欠乏しており、血が止まりにくい病気だった。そのため、健康な人なら小さな傷や打撲で済むものも、叔父の場合は大出血につながる。自然出血も頻繁に起こり命に関わる。叔父の病気は決して治ることのないもので、一生涯にわたる治療が必要だった。しかし、その治療はとても高額な費用がかかり、家計への経済的な負担はあまりにも大きくなることが予想され、祖父母は先の見えない不安に押しつぶされそうになったと話していた。そんな中、希望となったのが日本の医療制度だった。

日本の医療制度は、「国民皆保険制度」といい、全ての国民が公的医療保険に入加入し、保険料を支払うことで医療費の負担を軽減している。診療費は負担割合に応じて支払い、残りは保険と税金で賄われている。また、完治が難しく治療費が高額な疾患の場合は、自己負担額の一部または全額を国や地方自治体が負担する医療費助成制度が利用できる。こうした制度のおかげで、叔父は安心して治療を続けることができ、家族も経済的な負担を心配せずに生活を送ることができた。

母と祖父母は、買い物の際の消費税も、毎年届く自動車税や固定資産税の納付書も、文句ひとつ言わず納める。税金に対して抵抗感がなく見えるのは、家族が税金によって救われたからだ。感謝の気持ちと、納税の重要性に対する深い理解があるのだと思う。世の中には、税金に否定的な人もいる。しかし、税金がなければ、安心して暮らすことができない。特に、日本の医療制度は命を救い、人々に希望を与える重要なものだ。だが、少子高齢化、医療技術の進歩、生活習慣病などの慢性疾患の増加で、医療費は年々増え、財政を圧迫している。このままでは、医療制度の維持が難しくなる。これを守るためにには、一人一人が健康を意識し、定期的な健康診断を受け、病気の予防を心がけることが大切だと思う。また、後発医薬品を活用し、不要なはしご受診をしない、軽症なら市販薬を使うなど少しの工夫で医療費を抑えられる。改めてこの制度の重要性を考え、社会全体で守っていく必要がある。

私たち国民は、税金の仕組みや使い道を学び、重要性を理解することが大切だと思う。また、家庭や学校で税金について話し合うことも、納税意識の向上につながると思う。私も数年後には納税者になる。納税義務の意味を理解し、税金が有効に使われるよう、健康管理や環境保護にも気を配れる、責任ある納税者になりたいと思う。